

国史跡 午王山遺跡の時代

石川日出志（明治大学文学部）

1. 集落群の中の午王山遺跡

和光市午王山遺跡は、武蔵野台地の北縁の一面をなす独立丘に立地する。1981年の調査で、中央を横断する市道部分が発掘され、丘上の平坦部全域に竪穴建物（住居）跡が密集、居住域を区画すると判明した。これまで15次にわたる調査で、弥生時代中期後葉に小規模な集落として始まり、後期になると丘上全域で住居が繰り返し構築され、後半まで存続した。後期中葉の一時期、二重の環濠（A・B溝）が居住域を取り囲み、緩い坂を少し下った西端部にも弧状の濠（C溝）が設けられる（図1）。弥生時代集落の全容とその推移がつかめ、それらがよく保存されることや、周辺諸地域との交流もわかることから、2020年に国史跡に指定された。

しかし、午王山遺跡はこの地域に単独で営まれたわけではない（図2）。午王山遺跡と同じく後期の環濠集落として、午王山遺跡の南側を取り巻く谷地形を挟んで東西1km弱の台地上に吹上遺跡（東）と花ノ木遺跡・半三池遺跡（西）がある。これだけでなく、和光市域の武蔵野台地北縁はびっしりと弥生時代後期の集落が並ぶ。図2では東京都の北区から板橋区東部域にかけての一带が代表例しかプロットされていないが、実際には上野界限から埼玉県富士見市域までの弥生時代後期の集落が連綿と連なり、その総延長は25kmにも及ぶ。その中でも特に和光市界限の遺跡密集度が高いことに注目したい。

約7km北方の大宮台地南縁でも環濠集落を含む集落群があるし、両地区の間に広がる荒川（旧入間川）低地でも微高地上の各所に集落遺跡がある。戸田市鍛冶谷・新田口遺跡は低地に営まれた集落の代表例である。史跡指定されたのは午王山遺跡だけだが、これらの遺跡群の中に午王山ムラが

あったことを忘れてはならない。

大小の環濠集落や低地の集落が、それぞれ個性を発揮しつつ、連携し合う地域社会を構成していたのであろう。

2. 南関東の中の午王山遺跡界隈

関東地方における弥生時代中期後半と後期前半の土器型式の分布状況を図3に示した。関東地方は、個性的な土器型式が複雑に入り組んだり、錯綜したりすることが特徴である。中期後半（図3左）では東海系・中央高地系・東北系の3系統が関東に進出し、その中央北部に在来伝統が明瞭な型式が併存する。それが後期になると再編されて図3右のようになる。午王山遺跡（★印）は南関東系と中央高地系（岩鼻式）が重なる地域に当たる。しかし実態はさらに複雑で、東遠江の菊川式に由来する特徴や西駿河の登呂式土器もあり、複雑な様相を呈する。なにやら広域にわたる交流や、それに伴う地域関係の編成替えが起きているかのようである。

3. 同時代の西日本の動き

午王山遺跡の全盛期はおおよそ西暦紀元後1世紀から2世紀前半にあたる。その頃、西日本では何が起きていたのであろうか。まず挙げるべきは、日本列島に住む倭人の中の最有力者が、強大な権力機構を作り上げていた漢王朝と直接外交交渉を行った点である。『後漢書』倭伝には、建武中元二年（A D 57年）に倭奴国が奉貢朝賀したのに対して、皇帝の光武帝が印綬を与えたとある。江戸時代に志賀島で発見された「漢委奴國王」金印がこの印綬の「印」である。さらにその50年後の安帝永初元年（A D 107年）にも倭国王帥升等が外交交渉を行った。『魏志倭人伝』に見える

卑弥呼の景初3年（A D 239 年）の外交に対する答礼品を参照すると、『後漢書』には全く記事がないものの、各種の織物や物品が答礼にとして大量に賜与されたはずである。

これら外交交渉で入手したとみるべき物品は北部九州だけでなく、東方にももたらされた。例えば、岐阜市瑞龍寺山遺跡で発見された四葉座内行花文鏡は後漢初期の製品で、遺跡で後期前半の土器と共伴した。22.1cm という面径は大型鏡に属し、外交レベルでしか入手できない。

もう一つ注目したいのは近畿一帯における銅鐸の鑄造や流通に激変が起きている点である。大陸から入手した地金を用い、青銅器鑄造であるから専門工人である。後期初頭までは多数の工人集団が併存したのが、後期前葉には基本的に2つの型式（近畿式と三遠式）に集約されている。しかも、近畿の弥生文化を代表する祭器なのに、奈良盆地ではすでに銅鐸祭祀から離脱している可能性がある。近畿周辺でも地域間関係の再編が進行していたとみる。そうした余波が関東にも及んだと私は考える。

4. この界隈にも西方からの動きが

関東の弥生時代後期の遺跡で、石斧など石製利器が見つかることはごく稀である。利器がほぼ完全に鉄器となった時代だからで、その鉄器素材はすべて朝鮮半島東南部から入手した。鉄器自体は残りにくい、実際には膨大な量に達したはずである。鉄器以外を見てみよう。

図7は、西日本に由来する青銅器が弥生時代後期後半に関東地方の各地にもたらされたことを示した。東京湾沿岸では、三遠式銅鐸を原形とした有文小銅鐸や、九州から南関東まで広く流通した無文小銅鐸がかなりの例数に上る。午王山遺跡では銅鐸形土製品3点がA溝から見つかった。銅鐸でも小銅鐸でもないが、何らかの銅鐸祭祀が行われたからこそ土製品が見つかるのである。

日常生活の面でも西方に由来するものとして平地住居を挙げよう（図6）。関東地方の住居は竪穴建物が主であったのが、後期中葉から低地仕様である平地住居が現れる。これは愛知・静岡両県域の低地に立地する集落用に作り上げた住居構造である。武蔵野台地上の遺跡では見られないが、鍛冶谷・新田口遺跡では明瞭である。

午王山遺跡に住んだ人びとは、こうした激動の時代を生きていた。



午王山遺跡第2次調査空撮北西から 昭和56（1981）年

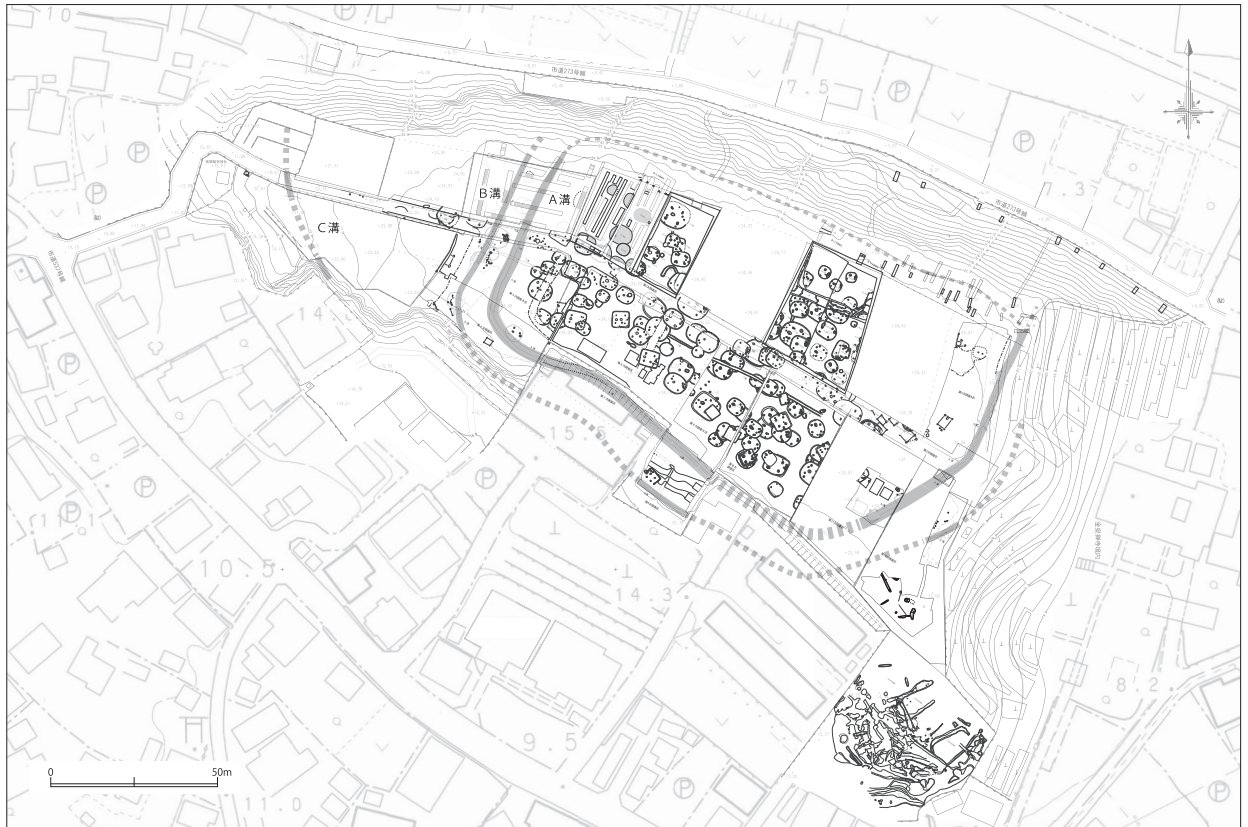


図1 午王山遺跡の全景 独立丘上に住居群が密集し三重の環濠が巡る

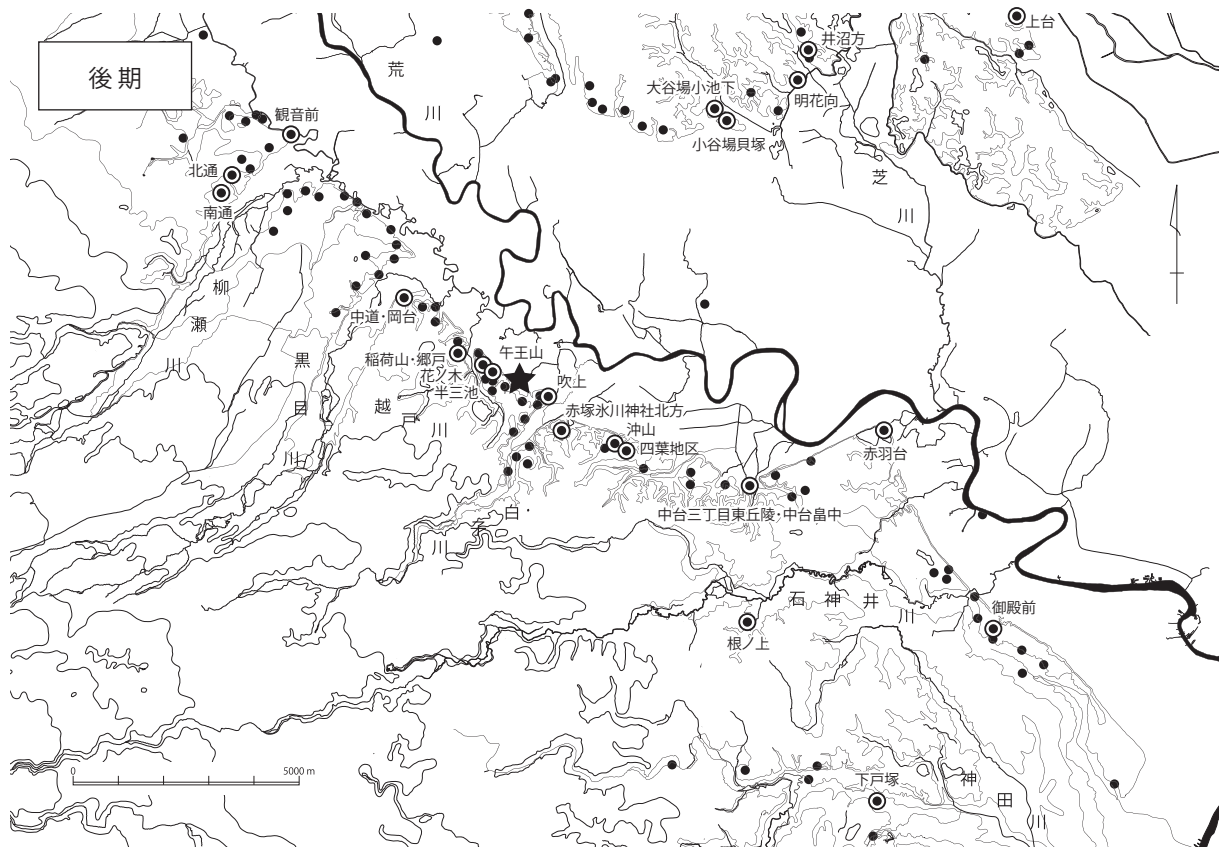


図2 午王山遺跡周辺の遺跡分布 荒川低地に臨む台地上に遺跡が密集する
(●は環濠を持つ遺跡)

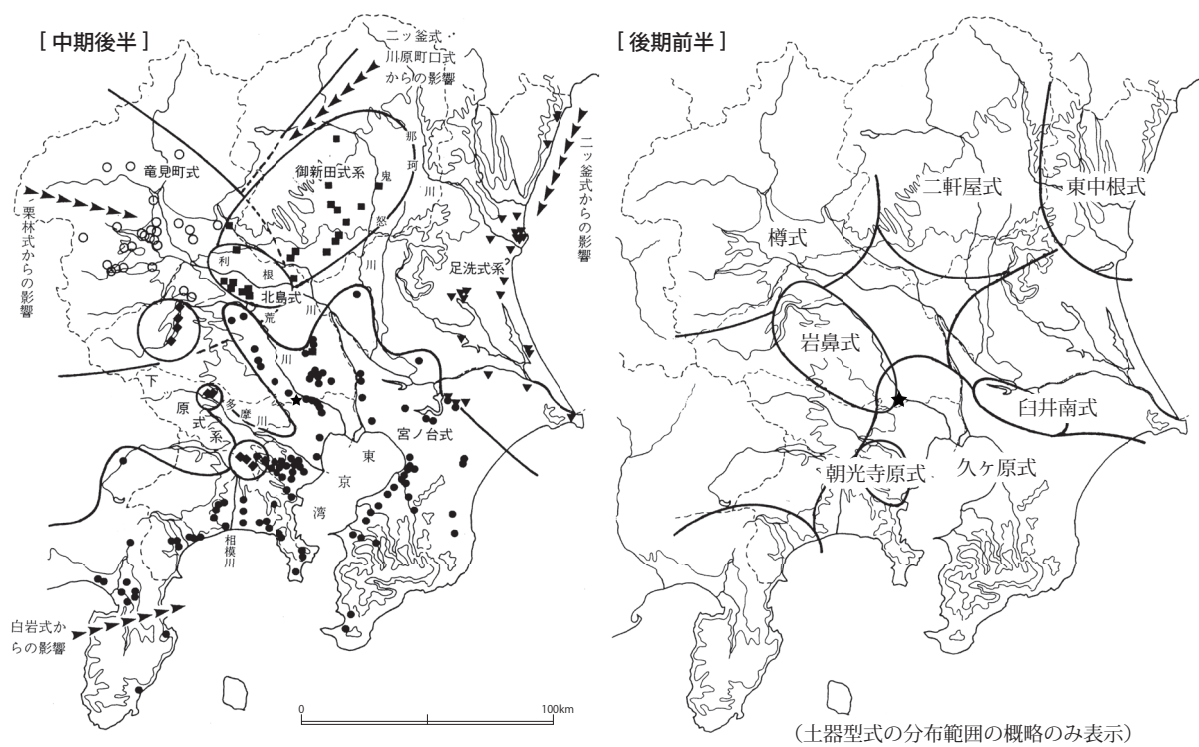


図3 南関東の土器形式分布図 午王山遺跡は土器分布図の境界領域にある

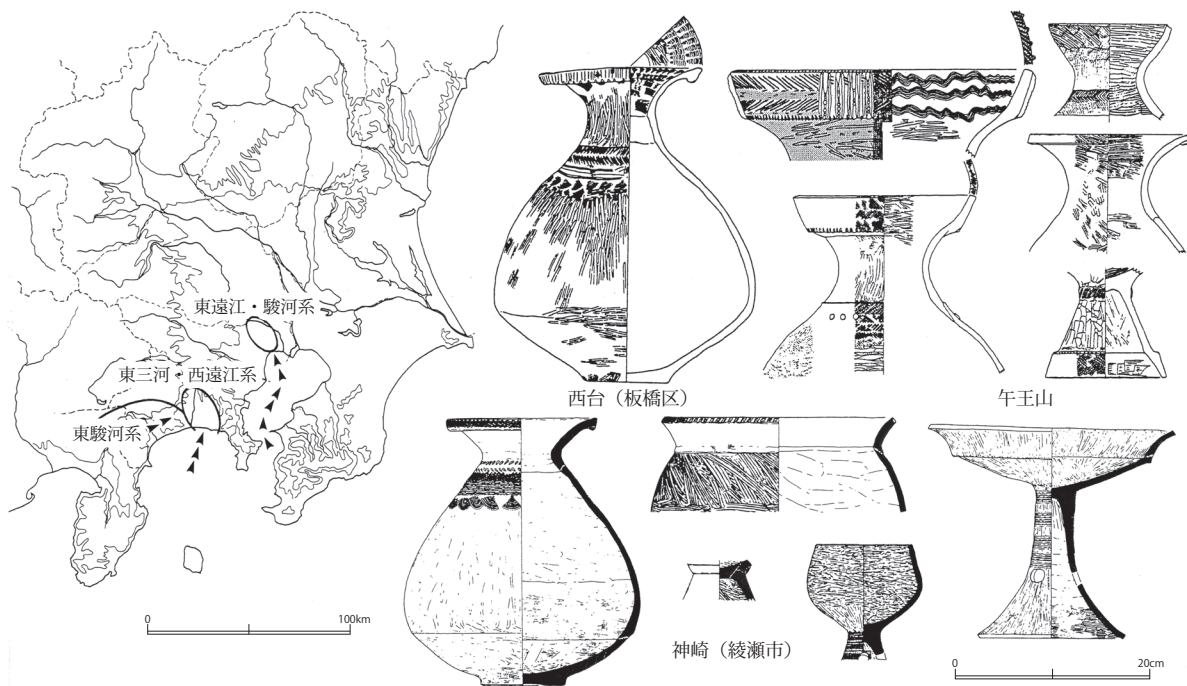
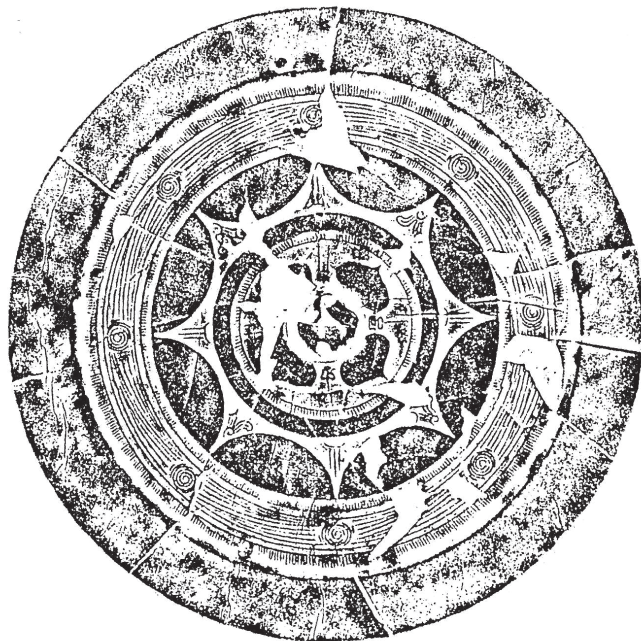
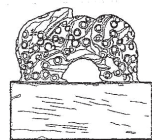
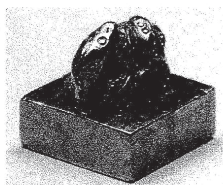


図4 弥生時代後期に東海系土器が南関東に浸透する
上段：東遠江・駿河系、下段：東三河・西遠江系

建武中元二年、倭の奴国、奉貢朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜
うに印綬を以てす。
安帝の永初元年、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願う。

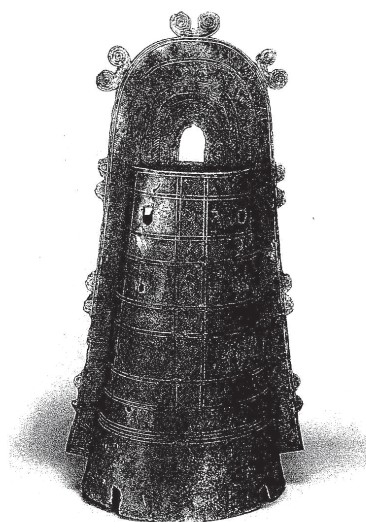


後漢初期の銅鏡が濃尾に 岐阜市瑞龍寺山遺跡 (直径 22.1cm)

(出典)『岐阜市史』史料編

外交：「漢委奴國王」金印と後漢書

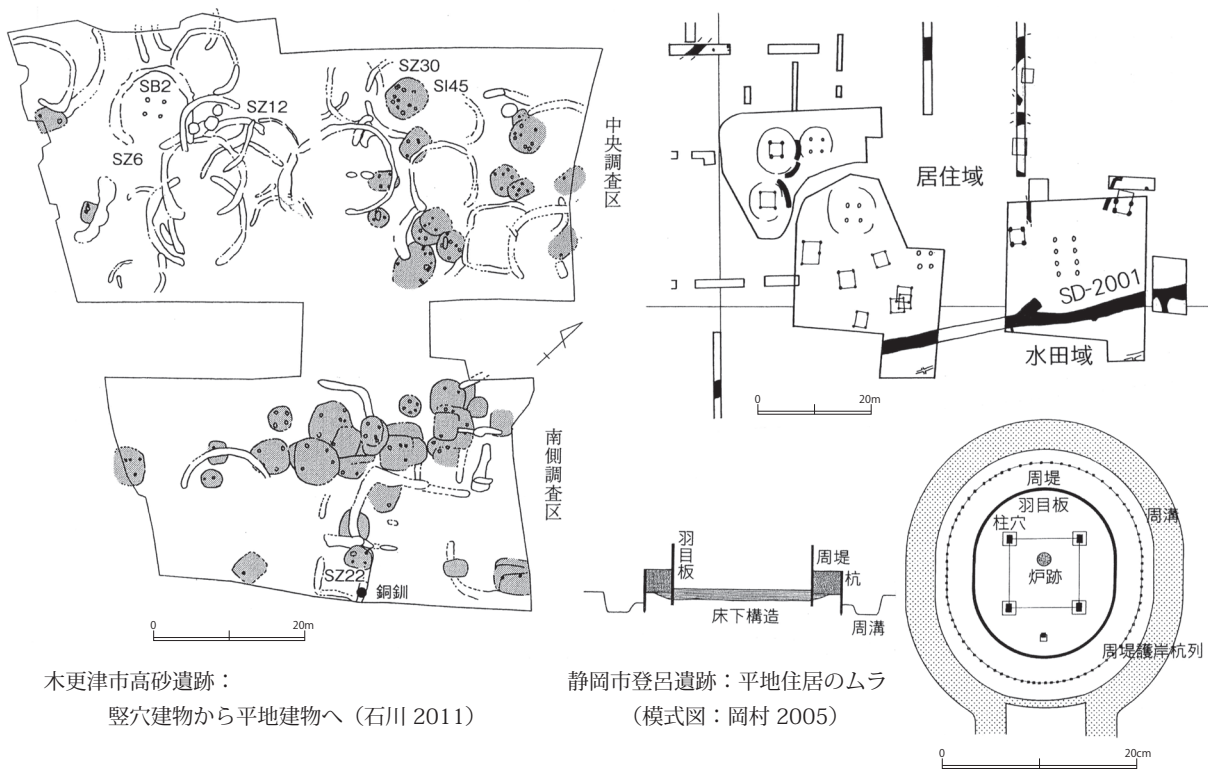
(出典) 岩波文庫(青 401-1)・福岡市博



近畿式C系列 (浜松市才四郎谷遺跡：高 72.4cm) 三遠1式 (浜松市前原Ⅷ遺跡：高 68.5cm)

多数あった銅鐸の鑄造組織が二つに集約 (出典) 浜松市博『銅鐸から銅鏡へ』

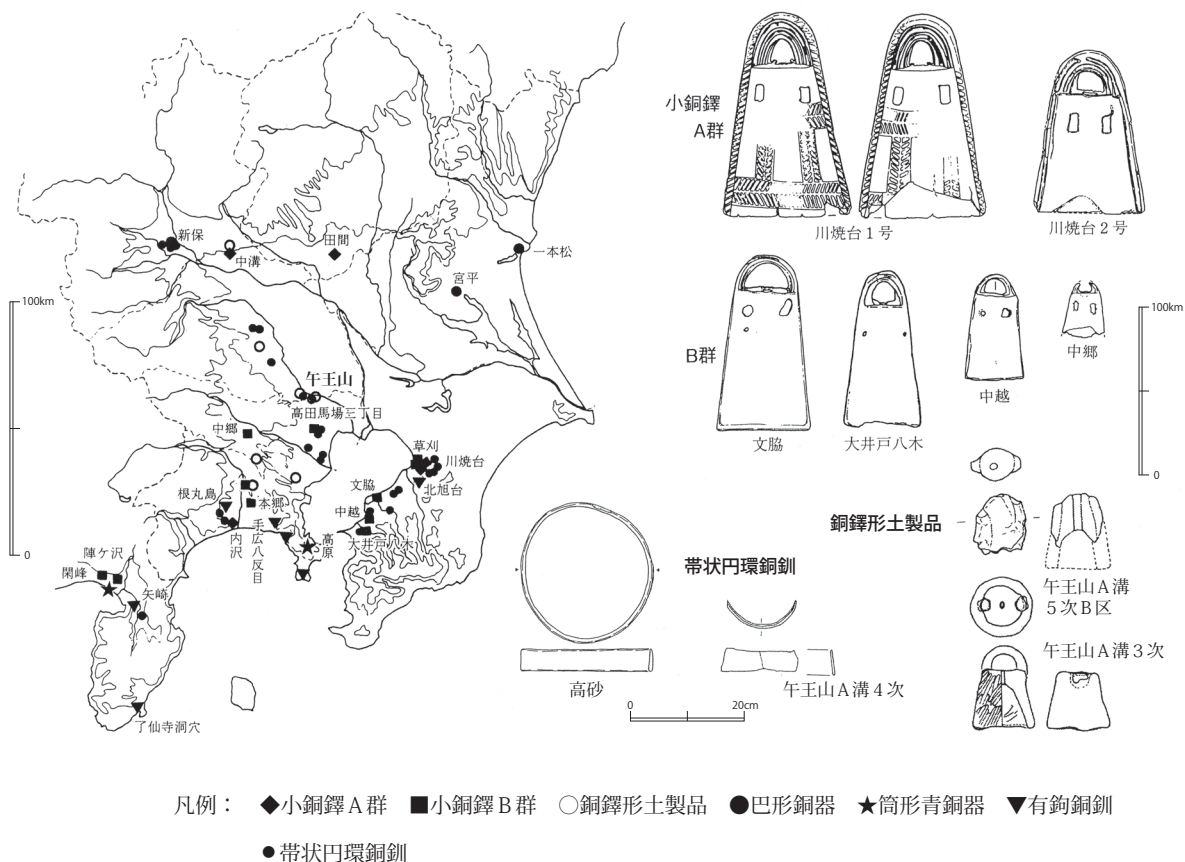
図5 午王山遺跡の時代に西日本方面に起きていたこと



木更津市高砂遺跡：
 竪穴建物から平地建物へ（石川 2011）

静岡市登呂遺跡：平地住居のムラ
 （模式図：岡村 2005）

図6 低地仕様の住居構造が静岡方面から波及
 荒川低地では戸田市鍛冶谷・新田口遺跡が代表例



凡例： ◆小銅鐸A群 ■小銅鐸B群 ○銅鐸形土製品 ●巴形銅器 ★筒形青銅器 ▼有鉤銅釧
 ●带状円環銅釧

図7 西日本青銅器文化が関東にも波及 午王山遺跡では銅鐸形土製品